

# 消化器病理カンファレンス

## SSA/P ADENOMA WITH CYTOLOGICAL DYSPLASIAの一例

2018年7月2日

肝胆膵消化器病学

吉原 努

## 77歳 男性

【主訴】血便、貧血

【既往】関節リウマチ、陳旧性心筋梗塞ステント留置後、憩室出血

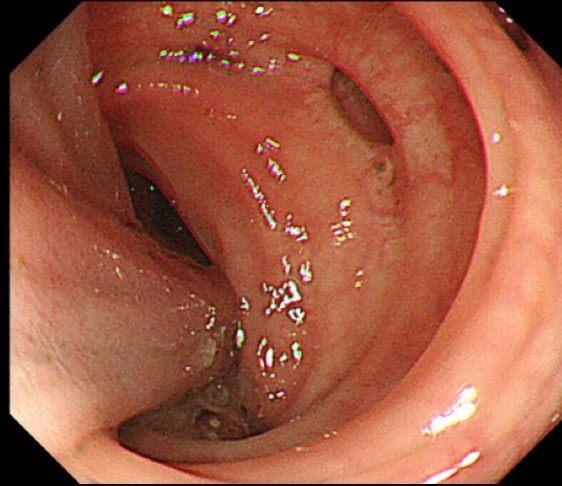
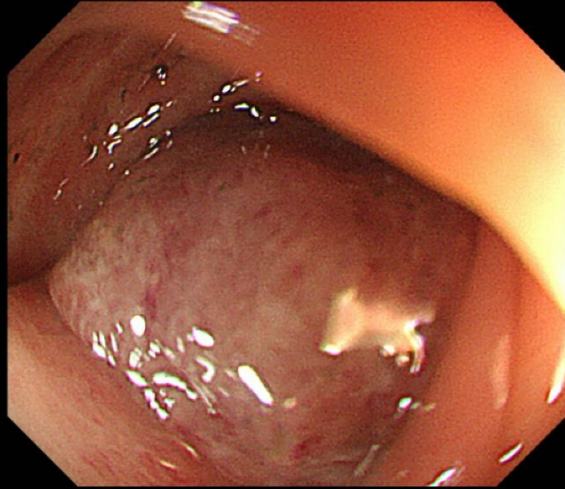
【内服薬】**バイアスピリン**、カルベジロール、アムロジピン、クレステール、プレドニゾロン、タクロリムス、フェロミア、タムスロシン、タケキャブ、ミゾリビン、マイスリー、レンドルミン

【現病歴】

陳旧性心筋梗塞により循環器内科通院。これまでもたびたび血便を認めては、自然に止血されていた。

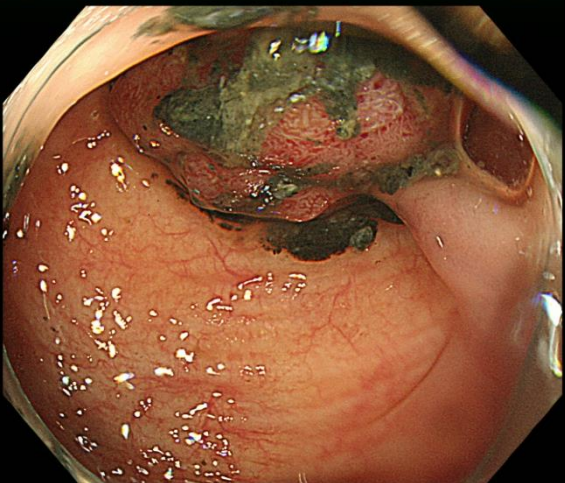
20xx年1月下旬に血便を認めたため、内服していたクロピドグレルを中止し、抗血小板薬はバイアスピリン1剤のみになった。貧血進行もあり、20xx年2月に大腸内視鏡検査を行った。

# 2018年2月下部消化管内視鏡検査



S状結腸

25mm I p



直腸

15mm I p

※ S状結腸憩室多数あり。  
その他にも小ポリープ多数。

これらのポリープ切除を行うため、4月に内視鏡的切除を行う予定となった。

# 血液検査所見

## 血算

WBC 8,600 / $\mu$ l  
RBC  $522 \times 10^4$  / $\mu$ l  
Hb 13.2 g /dL  
Hct 41.8 %  
Plt  $18.4 \times 10^4$  / $\mu$ l

## 生化学

AST 22 U/L  
ALT 14 U/L  
LDH 187 U/L  
ALP 188 U/L  
 $\gamma$ -GTP 15 U/L  
Bil 0.7 mg/dL  
BUN 16 mg/dL  
Cre 1.03 mg/dL

Na 142 mEq/L  
K 4.4 mEq/L  
Cl 106 mEq/L  
Glu 106 mg/dL  
HbA1c 5.9 %

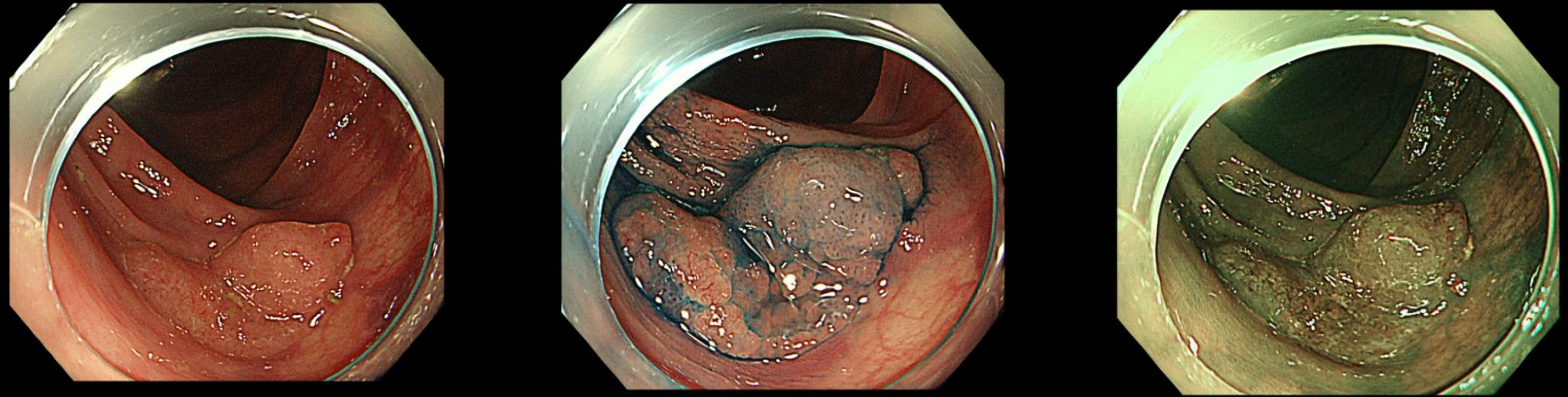
## 凝固

PT-INR 0.99  
APTT 26.5 sec

## 腫瘍マーカー

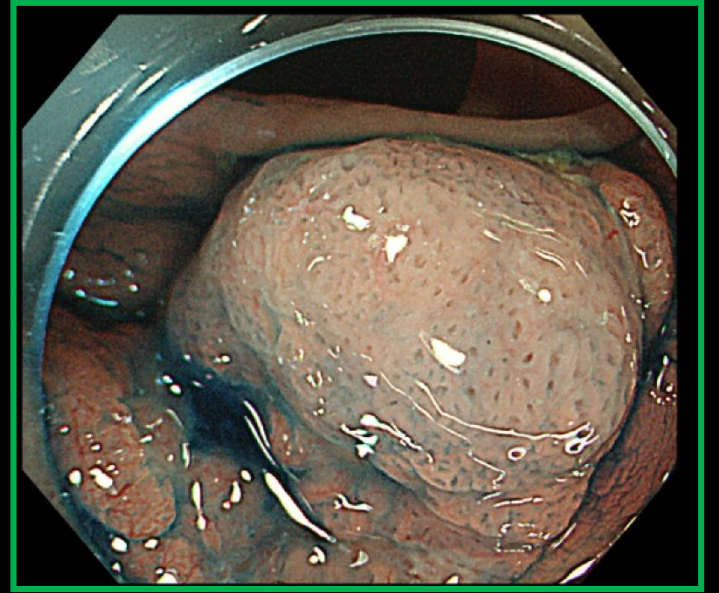
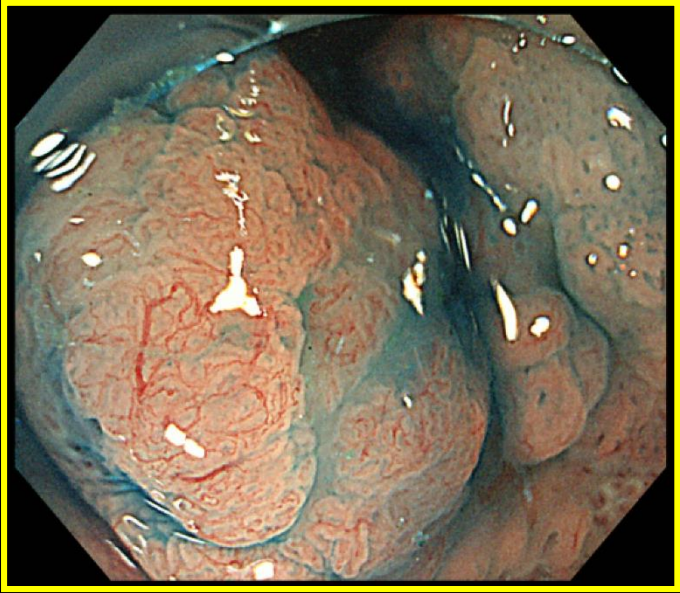
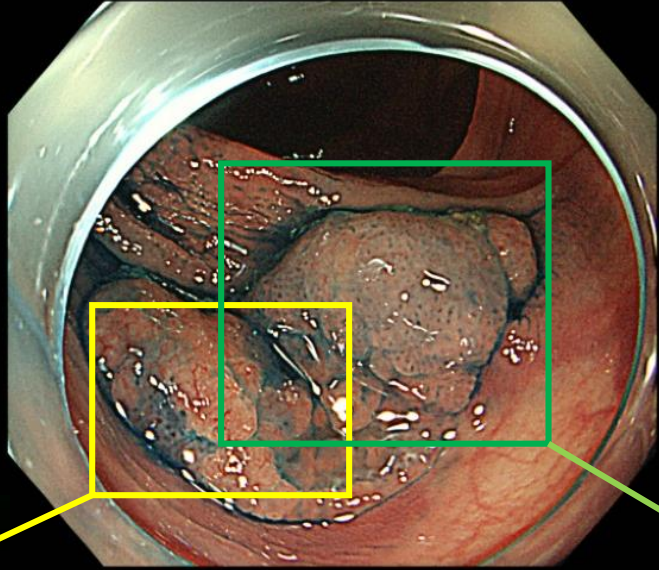
CEA 4.6 ng/ml  
CA19-9 40 U/ml

# 2018年4月下部消化管内視鏡検査

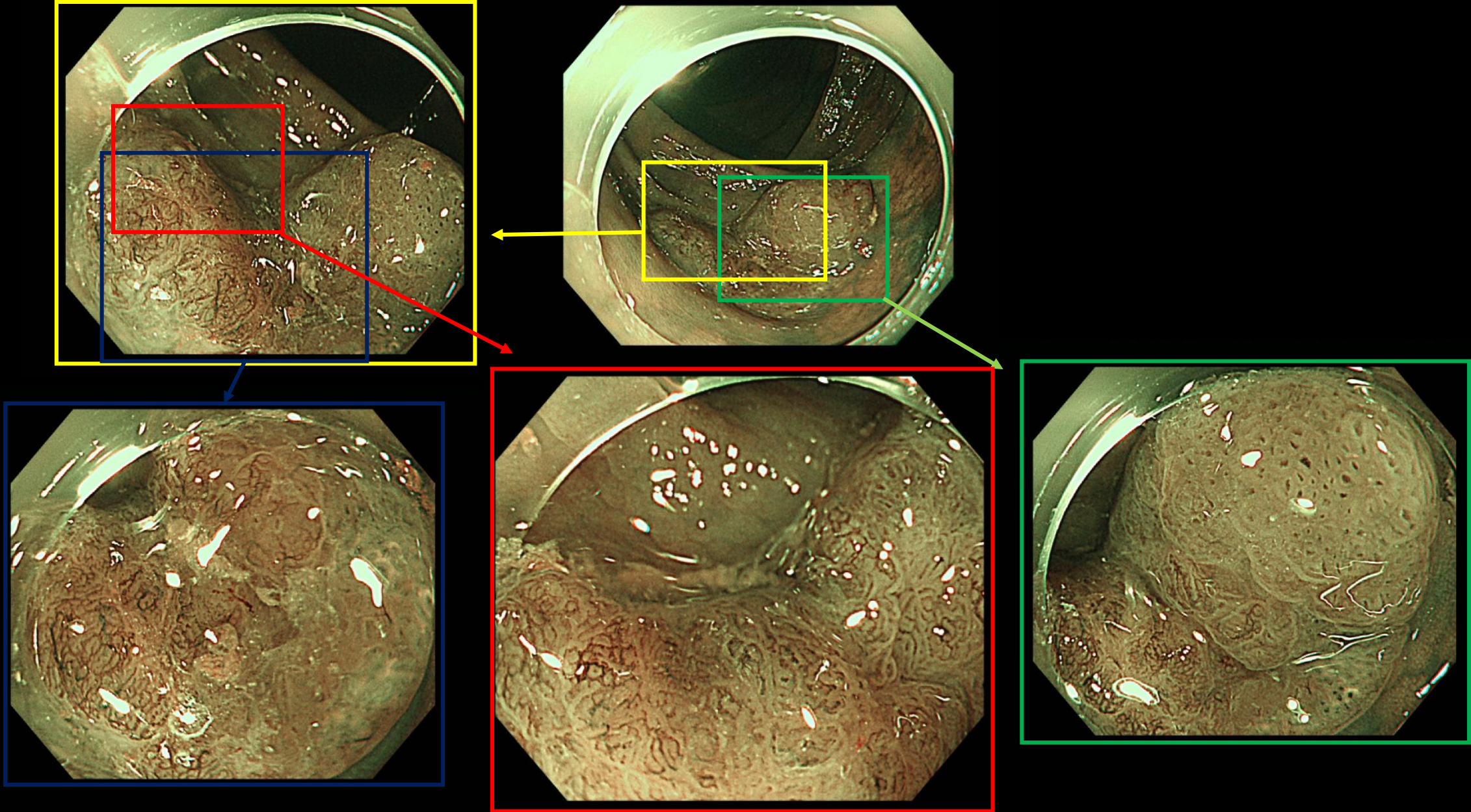


上行結腸に18mm大の0-IIaを認めた。

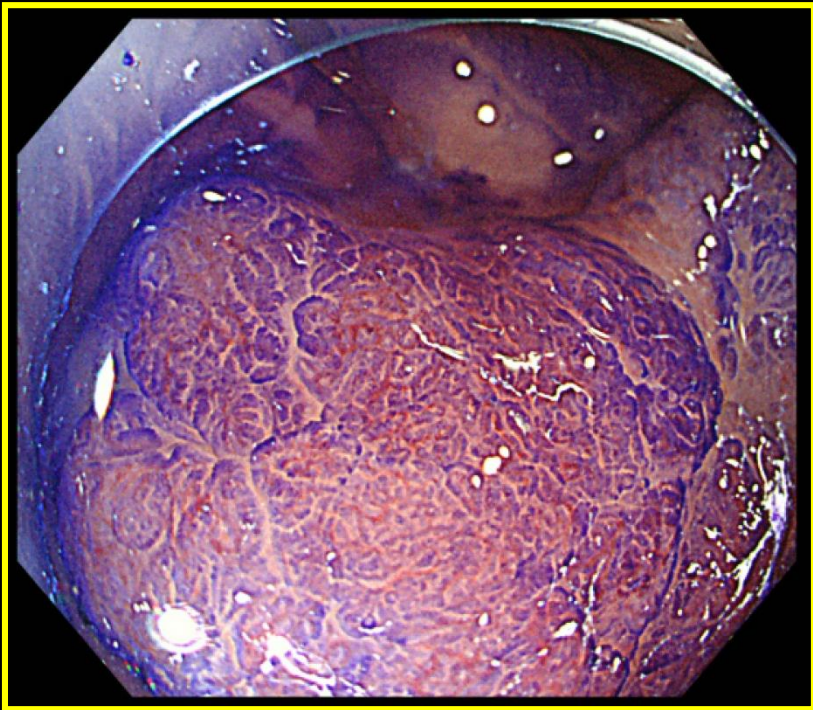
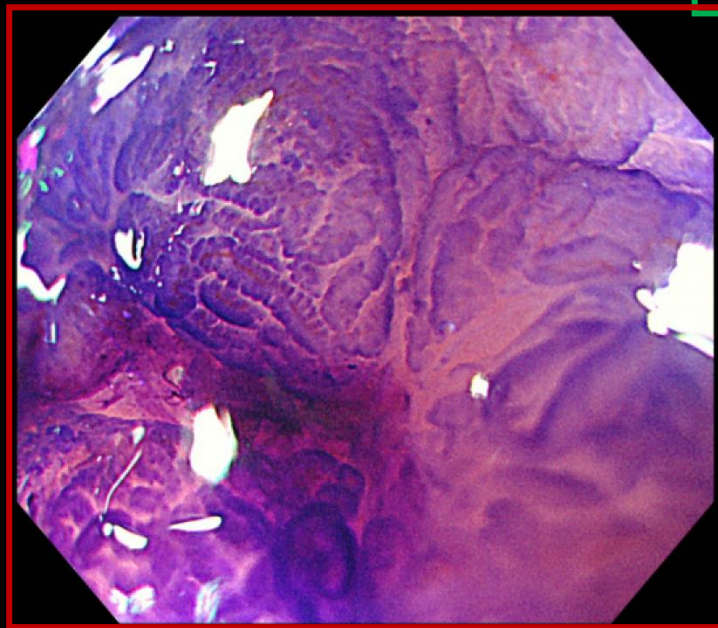
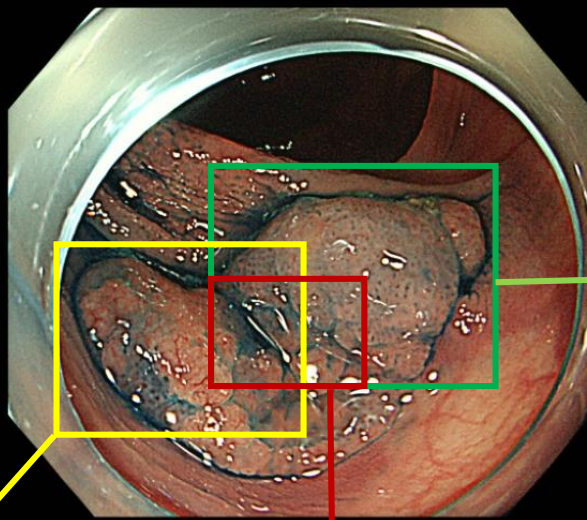






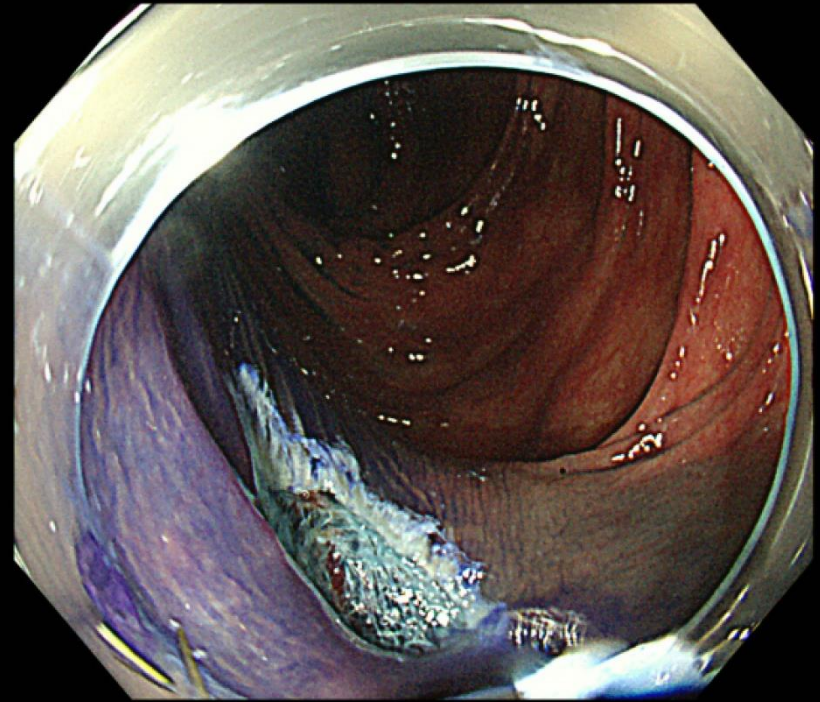
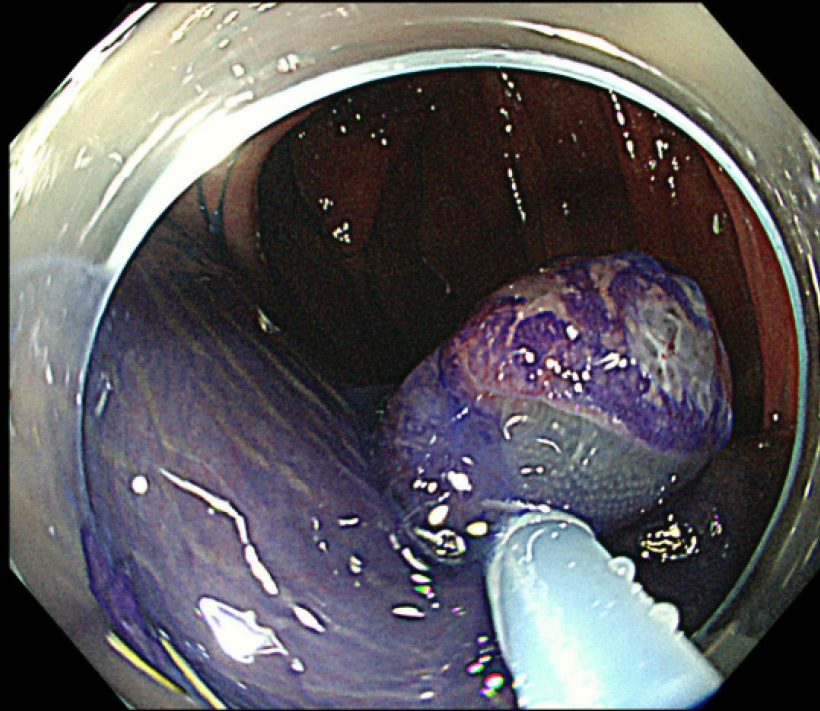








# EMR施行



## 診断

*Carcinoma arising in sessile serrated adenoma / polyp*

## 経過

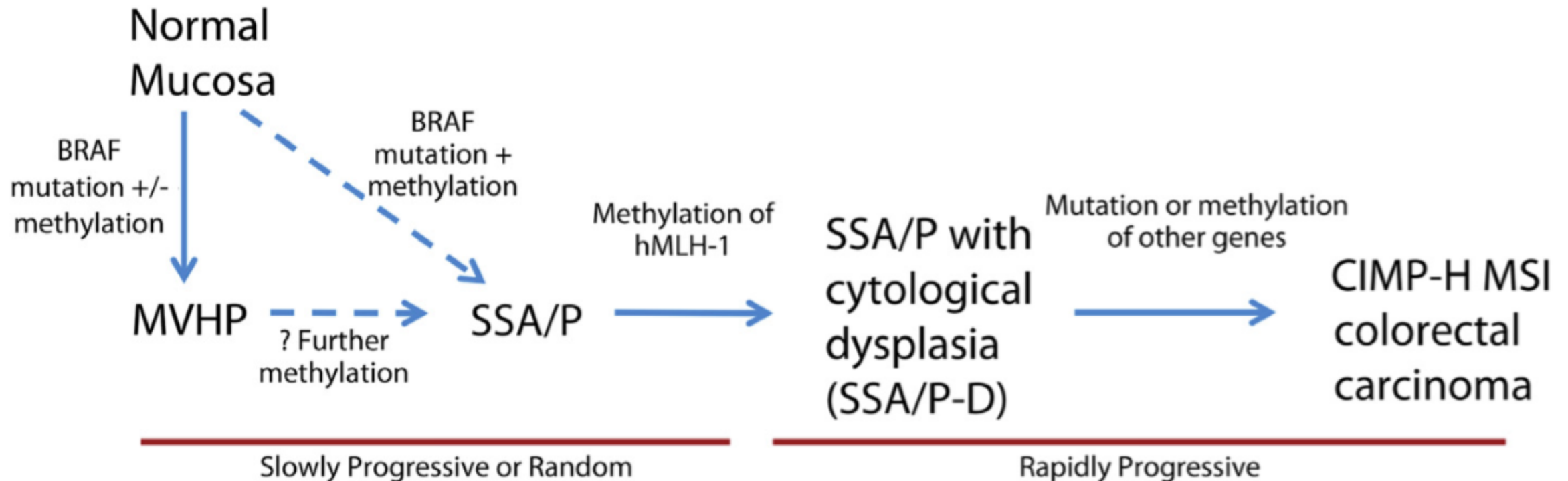
切除検体は断端陰性であったが、SM 1005 $\mu$ m, リンパ管侵襲、静脈侵襲陽性のため、追加切除適応となった。

S状結腸の I p についても、リンパ管侵襲陽性、簇出 Grade 2 のため、追加切除適応だったが、患者の希望により経過観察の方針となった。



# SSA/P adenomas / polyps with cytological dysplasia

- 2010年にWHOで提唱された概念である。
- SSA/PよりMLH-1 遺伝子の異常により、腺腫と類似した像を示すようになる。
- 進行が早く、見逃すこともあるため注意が必要な病変である。



## SSA/P adenomas / polyps with cytological dysplasia

- 通常のSSA/Pと同様に、右半結腸に多い。
- pit pattern はⅢ、Ⅳ あるいは Ⅴ型を呈する。High grade dysplasia やcarcinoma の症例では、I s など結節を伴うことがおおくなる。
- サイズが小さくても、深部に浸潤することがあり、急速に発育するものがあることが示唆されている。



# 総括

- SSA/P adenoma with cytological dysplasia より発癌した腫瘍を切除し、病理学的な評価を得られた貴重な一例を経験した。
- SSA/P は見逃されやすい病変であり、interval cancer の原因となるといわれている。特に、SSA/P adenoma with cytological dysplasia からの発癌は、進行が速いことがあり注意を要する。
- 今後は、このような病変が存在することを念頭にいれ、診療していくことが重要である。